



コーヒーブレーク

# 「新型コロナとスペイン風邪と東川と」

東川町史第3巻を執筆中の2020年（令和2年）春、新型コロナウイルス問題が深刻化している。実はちょうど100年前の1920年（大正9年）前後に、スペイン風邪と呼ばれたインフルエンザウイルスが世界中で猛威をふるった。これは歴史の教科書にも載っていることだが、東川村（当時）を含む上川地方でも大きな被害が出ていたことはあまり知られていない。この地で実際にあった100年前のパンデミック（感染症の大流行）と、それを克服した経緯を振り返ってみる。

## はじめは切迫感なく

「旭川区内（注1）の流行感冒各小学校で三割前後の欠席者」。

1918年（大正7年）11月2日付の北海タイムス（注2）にこんな見出しの記事が掲載された。

この年の初めから世界中で流行が始まっていたスペイン風邪（注3）が日本でも流行し始めたのは10月ごろから。北海タイムスで10月26日付で「東京の悪疫流行 東京市内各社、銀行、官庁などで欠勤者続出」などと報じていた。

ただ11月初旬ごろまでの新聞には、死亡者に関する記事は多くなく、緊張感の中にも切迫した様子は見られなかった。

ところが、わずか2週間ほど後の11月中旬から、様相が一変する。

## 前代未聞ノ光景ヲ呈セリ

2006年（平成18年）刊行の新旭川市史第3巻は北海タイムスの記事を引用して、スペイン風邪の流行を次のように記述している。11月19日付の記事だ。記事では旭川で死者が急増している様子を生々しく伝えている。

「旭川の感冒は未だ終息に至らず死亡者多く、神居、高台の両火葬場には白木の棺桶積載しあり、前代未聞の光景を呈せり」（旭川）区役所の調査によると、10月8日より11月14日までの死亡数は147名。うち感冒死亡者75名にして前年同期の59名に比して著しき増加を（略）」（表記は現代文に直した）。



スペイン風邪がはやっていったころの旭川駅前。  
乗合馬車や人力車が見える＝1921年（大正10年）  
撮影。郷土史ふるさと東川より

（注1）全国的には1888年（明治21年）に市町村制が導入されたが、開拓途上だった北海道は「時期尚早」として翌89年、北海道一・二級町村制と区制が敷かれ、函館、札幌、小樽の3区が誕生した。1914年（大正3年）には旭川も町から区になった。室蘭、釧路もその後、区になったが、22年（大正11年）に道内でも市制が敷かれ、6区は市に移行した。

（注2）北海タイムスは1887年（明治20年）に札幌で北海新聞として創刊された日刊紙。新聞の「1県1紙」体制が強制された戦時体制下の新聞統制により1942年（昭和17年）、小樽新聞や新函館、旭川新聞など道内10紙とともに北海道新聞に統合された。戦後、1998年（平成10年）まで発行された北海タイムスは、戦前の北海タイムス関係者が1946年（昭和21年）に創刊した新北海が起源。

（注3）スペイン風邪と一般に呼ばれるが、スペインが発祥であるわけではない。当時は第1次世界大戦（1914-18年）の最中で、参戦していた欧米諸国は「士気を下げる」として悪病がまん延しているという報道を規制していた。ところが欧州では例外的に中立国だったスペインでは報道規制がされなかったため、スペイン発の関連報道が世界に発信され、スペイン風邪と呼ばれるようになったらしい。

日本の新聞などでは「<sup>スペイン</sup>西班牙風邪」や「世界感冒」「流行感冒（流感）」「悪性感冒」などと表記されることが多かった。当時は「大陸から風に乗って病原菌が飛んできた」との俗

## 東川村の「萬造日記」

ちょうど同じころ。東川村(注4)では農家の篠原萬造<sup>まんぞう</sup>が11月27日付の日記に「流行感冒」と短く記していた。日記や農業日誌を丹念につけていた篠原の記録は「萬造日記」としてまとめられ、1994年(平成6年)刊行の郷土史「ふるさと東川」Iなどで紹介されている。

実は東川村史や過去の町史にスペイン風邪に関する記録はなく、村内でどの程度被害があったのかは分かっていない。ただ萬造日記には「**北海タイムス3カ月分2円10銭**」「**旭川新聞2カ月分90銭を払う**」などと書かれており、新聞は複数紙をとっていたようだ。このため日記にある「流行感冒」という記述は新聞を読んで得た情報だったのかもしれない。それとももしかしたら、篠原が村内で目にしたことを書き留めたのかもしれない。

その北海タイムスはこれ以降も、各地の惨状を次のように伝えた。

「札幌警察署長談 通常の倍の人数が毎日死亡」(11月16日)

「各地感冒 上富良野、剣淵、神楽、江部乙」(同20日)

「広尾 感冒の惨状」(12月27日)

「感冒犠牲者どここが多い 空知郡、函館区、上川郡、札幌区…」(1月9日)

「旭川感冒再燃 3日より突如死亡者505名」(3月7日)

説も信じられていたらしく、「シベリア風邪」といった表記も散見される。

(注4) スペイン風邪が広がっていた1918年(大正7年)の東川村の人口は8302人。2020年(令和2年)の8356人(2月末時点)とほぼ同じだった。翌19年(大正8年)に東川村は1級町村となり、西4号南2にあった役場庁舎が西4号北2に移転した。

## 深刻な被害

結局、スペイン風邪は全世界では1918年(大正7年)初頭から20年(大正9年)末までの約3年間、3回にわたって流行の波が押し寄せ、当時の世界人口の4分の1に当たる5億人以上が感染したとされる。死者数は幅があるが1700万人から5000万人と推計されている。

日本ではやや遅れて18年10月から流行の第1波が始まり、21年(大正10年)7月に第3波が終息するまで流行が繰り返された。当時の内務省衛生局がまとめた報告書「流行性感冒」によると、全国の感染者数は2380万人、死者数は38万8727人としているが、死者数は人口の0.8%に当たる45万人に上ったと推計もある。このうち北海道でも50万人以上が感染し、死者数も1万人を超えたとされるが、さらに多いという見方も根強い。

一方、内務省などが終息したと判断した21年7月以降も、局地的な流行は発生していたようだ。先述の郷土史ふるさと東川によると、4年後の1925年(大正14年)になって突然、東川村に関する次のような記事が北海タイムスに掲載された。

「2月19日、20日西南の風吹きすさんでから、老若男女の区別なく流感に襲われ、各戸1~2名ずつの患者を出し、なかにも、小児は麻疹(はしか)を併発して死亡する者が多い」(3月5日付)。

記事が風の話に触れているのは、「大陸から風に乗って病原菌が飛んできた」という俗説が信じられていたせいかもしれない。いずれにしてもこれが、東川村での感染に関し、現時点で確認できる唯一の具体的な記録だ。



流感の被害が出ていた1925年(大正14年)に東川村西4号南2番地に開業した劇場「長盛館<sup>ちやうせいいん</sup>」。このころの人口は今と同じ約8300人で、市街地はにぎわっていた。

## 感染症の克服へ

1925年(大正14年)2月から東川村で流感がはやった話には続きがある。この年は流感に続いて腸チフスが流行し(注5)、村内で腸チフスの患者数59人、うち15人が死亡するという大きな被害があった。このころ東川村には個人経営の医院が数軒しかなく、患者の多くは自宅で療養したため、家族にうつる例が多かったという。

ただ流感に加え、はしか、腸チフスが相次いで広がったことは、村当局が感染症対策に乗り出す大きなきっかけにもなった。村は村民に呼びかけ、地域ごとに24の衛生組合を組織し、衛生講習会や映画会の開催、予防注射のPRなどに努めた。

またこの年10月には西4号北2線に、村が約975円(当時)をかけて平屋建の感染症隔離病棟を建設した。この隔離病棟はのちの1963年(昭和38年)、旭川市立病院に近代的な伝染病棟が新設され、東川から患者の受け入れを始めるまで活躍することになる。

さらにこのころから手押しポンプが村内でも普及し始め、良質の地下水を利用できるようになった。こうして1930年代半ばになると、腸チフスなど感染症の患者は激減していく。流感の記事が新聞に載ることもなくなった。

スペイン風邪をはじめとする100年前の感染症被害。東川や旭川など近隣はもとより全世界で大きな犠牲を払ったが、それが感染症を克服する契機にもなった。そうした歴史は、新型コロナウイルスが広がる2020年の今こそ、思い出されていいことなのかもしれない。

(注5) 今でこそ良質の地下水に恵まれている東川だが、開拓からしばらくの間は、地下の水脈まで深く掘り進める技術や道具が普及せず、川や池の水を生活用水に利用する人が多かった。このため昭和初期ごろまでは、腸チフスのほかジフテリアなどの感染症にたびたび悩まされていた。